

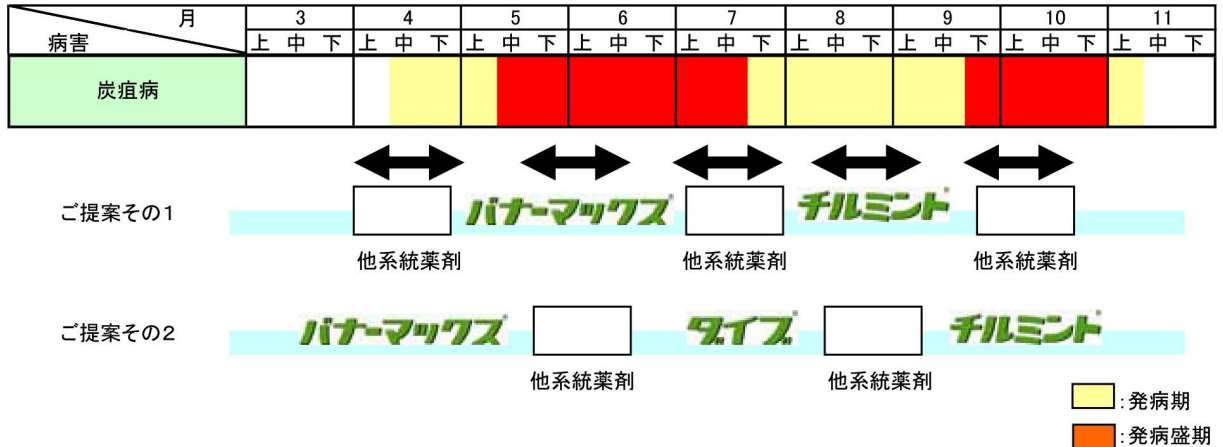
# ソリューションシート —シンジェンタからのおすすめ防除提案—

芝のストレス病ともいえる炭疽病。病原性は高くないのですが、防除をしないと地際部にある成長点が攻撃され、回復し難くなるためやっかいな病害です。多方面からの防除(耕種的・化学的防除)の取り組みが必要です。

## 炭疽病

### 発生時期と防除タイミング・年間ローテーションの提案

- 太平洋沿岸地域の平地における発生の場合



- 毎年、炭疽病の発生に悩まされるゴルフ場では予防主体の薬剤体系を設計します。
- 発病盛期には EBI 剤などの治療性にも優れた薬剤を選択します。
- 夏期高温時にはピシウム菌との複合感染も考慮します。

### 芝生用殺菌剤ローテーション資料

芝生用殺菌剤	EBI剤	メキシ アクリ レート系	ベンゾイ ミダゾ ール系	フェニル アマイド 系	抗生物 質殺菌 剤	酸アミド 系	グアニジ ン系	有機リン 系	接触型 殺菌剤	ピリミジ ン系
製品名	ステロ ール生 合成阻 害	呼吸阻 害	有糸核 分裂阻 害	RNA生 合成阻 害	キチン合 成酵素 阻害	呼吸阻 害	膜脂質 破壊	リン脂質 合成阻 害ほか	保護作 用	菌糸膜 攪乱
アグディー水和剤	マイクロブタニル						イミノクタジン	ジアルベシル酸塩		
ウィルド顆粒水和剤					ポリオキシ	D垂鉛塩		トルクロホスメチル		
カシマン液剤							イミノクタジン	酢酸塩		
グラコーン水和剤			チオファネートメチル					ホセチル		
グラポストフロアブル						フルトラニル				
グリーンエイト顆粒水和剤					ポリオキシ	D垂鉛塩		トルクロホスメチル		
シャルマツ水和剤			ベノミル			メブロニル				
ターフトップDF		クレソキシムメチル								
ダイブフロアブル	ジフェノ	アゾキシストロピ								
タフシーバフロアブル	テブコナゾール								ペンシクロン	
チルミント水和剤	プロピコナゾール			メタラキシル						
トップグラスドライフロアブル			チオファネートメチル							
トップティ水和剤	トリフルミゾール		チオファネートメチル							
トルファン					バリダマイシン					フェリムソ
パシパッチ水和剤	プロピコナゾール					メブロニル				
パッチコロシ水和剤	シメコナゾール									
パナーマックス液剤	プロピコナゾール									
ボンジョルノ乳剤	テトラコナゾール									
モノクタジンフロアブル						メブロニル	イミノクタジン	酢酸塩		
緑化用ベンレート水和剤			ベノミル							

## 防除のコツ

- 炭疽病はストレス程度により症状が異なります。正しく診断するために簡易ルーペを使って剛毛を確認します。ただし必ず剛毛を形成する訳ではないため、光学顕微鏡(x400 倍程度)で付着器の有無を確認し、その数が多いことで炭疽病と診断することもあります。



パッチ周縁部が不明瞭な炭疽病



剛毛はルーペで観察できないこともある



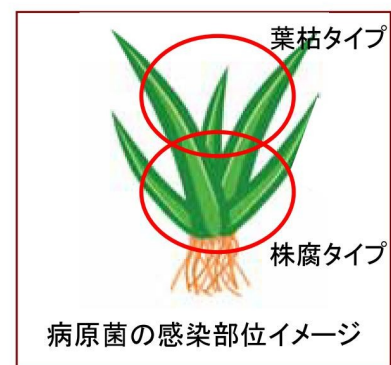
付着器の多さで診断することも

- 一度発生すると回復に時間を要する病害のため、毎年発生が確認されるゴルフ場では予防主体で殺菌剤を使用します。
- 病原菌が感染する場所により葉枯タイプ(主に葉に感染)と株腐タイプ(主に地際部に感染)に分かれます。葉枯タイプは 50-100ml/m<sup>2</sup>、株腐タイプは 100-200ml/m<sup>2</sup> で散布することが相応しいです。しかし2パターンが混在していることも多いため、地際部まで薬剤が到達するようにやや多めの水量(100-200ml/m<sup>2</sup>)を選択します。この場合、ターフジェットノズルがおすすめです。
- 早春から晩秋まで発生回数が多い病害で、また耐性菌の出現レベルは中程度のため、薬剤ローテーションを気にする必要があります。



## 管理のコツ

- 刈高をやや高くし、歩行式のマアを使用して、ストレスを最小限にします。
- 毎日外周を刈ることを避けます。
- 耐病性品種の導入やインターシードを行います。
- この病徴が出ている期間の更新作業は控え、症状が治まってから作業します。
- 芝密度の高い管理をすることで1個体にかかるストレスを減らします。
- 低窒素条件で発生しやすいので、そのコースに加わるストレスを吟味して適度な窒素レベルを維持します。



炭疽病は気温15℃を超えるようになると発生します。この病害は葉面が湿った状態が一日に10時間以上続き、しかもこのような日が数日連続するエリアで発生します。また、土壌のコンパクションが高い、過湿・過乾燥(ドライスポットなど)、低い刈高、低い窒素レベル、虫害、他の病原菌によってもこの病害が進行します。若い植物体よりも老齢の植物体に感染・発病しやすいです。